

芸術の秋 その1

芸術の秋であります。今週末の合唱部の県大会、10月20日の吹奏楽部の全国大会など、芸術にかかわるコンクールが続きますが、第3棟の美術室においては、毎日絵画の完成のためにひたすら筆を動かす美術部員の姿があります。

自画像であったり、犬の顔であったり、街の風景であったり、心象風景であったり、毎日毎日少しずつ完成していく、その絵画模様を眺めるのも、毎日の楽しみであるのです。

美術室のいたるところに、過去の生徒たちの奮闘の残骸が残されており、それは完成形であっても途中で止まってしまった未完成形であっても、その完成に心を砕いた残滓であることは間違いなく、高校生活そのものの名残であるのかもしれませんが。

ところで、私は、絵は好きですが苦手です。特に色が苦手です。色覚異常といわれてから、そのトラウマで、色そのものに確信と自信がありません。どのように自信がないかというと、赤いバラの花を夕方に暗がりで見るとふか緑色に間違えるという不安です。一瞬、緑に見えるのです。

世界のどこかで、色覚異常を治す眼鏡を持っている人はいないのでしょうか。それならば、本当の赤と緑の違いを見てみたいと思うのです。

また、人と違って異常であるということで、そのことによる差別のトラウマはずっと私の心の傷として心の奥深くに残っておりました。とげのようなもので、抜こうとしても抜けないものでした。

見えないものを見たり、聞こえないものを聞こえたりすることは特異な才能になることはあっても、見えるものが見えなかったり、聞こえるものが聞こえなかったりすると、なぜ人は差別するのでしょうか。異常という言葉それ自体でとても悩むことになることを人は知らないのでしょうか。

私の時代の理系の学部には、受験資格として色覚異常は不可という文言が間違いなくあったと記憶しています。色がわからないことから、医学の道が閉ざされても、理論物理学の道も閉ざされるのかという気持ちでした。

世の中というものがまるで分らなくなりましたが、自己否定することにより、生きる意欲を失ってはなりません。

何をしても、人は生きていけます。生きていくことは時にはつらいけれど、時には愉快で楽しいものです。60年生きてきて、そう思います。実際、乗り越え方はあるものでした。生きるが勝ちだと思いました。

